

加賀の一向宗

最近、友人の便りに対して下記の感想を書き送りました。ご参考になれば幸いです。

Xさん

加賀の一向一揆の話が出てきましたので、個人的な体験を申します。

私は加賀の農村の生まれです。稲作地帯の中心的なところで、230軒ほどの村には大小2軒の由緒正しいお寺がありました。大きい方の光徳寺は、一向一揆の際に信長が派遣した前田利家らの軍隊と戦った4つの指導的なお寺の一つの末裔でした。

敗戦直後、この寺の住職の長男が大谷大学の学生で、仲間の学生たちを引き連れてきて日曜学校を開いていました。小学生の私もその生徒の一人で、今もお経の一部を暗記していますし、阿弥陀如来をたたえる讃美歌を覚えています。そのころは、大人向けの法話も毎日午後に住職が行っていて、引退した爺さん婆さんが、毎日デイサービスを受けているかのように御詠歌、和讃、法話、読経を務め、その後お茶を飲んでいたようです。今でも郷里の葬式に行くと、その日のお経を印刷した小冊子が配られ、お坊さんだけでなく、ほとんどの出席者が唱和します。

江戸時代の加賀・能登・越中の3か国(100万石)は、尾張から来た前田進駐軍の支配に服していましたが、村単位の治政は仏教寺院と地侍(郷士)の自治組織が強く、支配階層は年貢さえ納めてくれれば庄屋や旦那衆に任せるといった緩い支配だったようです(とくに関東の農村と比べると)。

浄土真宗は精神主義が強く、自己の内面に向かう関心を重視していました。私は大学に入って東京へ来て名所を回った時、関東の寺院があまりに現世の御利益・僥倖を奮発しているのに驚きました(熊手やだるまなどの縁起物)。金沢では、神社仏閣に参拝したら、「家内安全」「無病息災」がやってくるという信仰は経験していませんでした。

金沢市内に東本願寺別院があり、毎年1回御開帳があって子供のころ母親に手を引かれてお参りしましたが、地獄極楽の掛け軸がたくさんかかっていて、「悪いことをすると火あぶりになったり、餓鬼道に落ちたり、釜茹でになったり」という身の毛もよだつ絵を、これでもかというほど見せられて、青くなっていました。当然、極楽の絵もたくさんあったはずですが、ほとんど記憶に残っていません。というのは、仏教の西方浄土は、平等院鳳凰堂の、琵琶をつま弾く天女が空中に浮遊しているような図柄だと思いますが、それでは小学生にはどこがおもしろいのか分かるわけがありません。

東京に住む期間の方が長くなってしまいましたが、今でも時々北陸の精神主義と関東の御利益主義との対比を思い知らされることがあります。

(2018年4月11日 哲)